

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

令和元年 7 月 23 日

所属部局・職	霊長類研究所・修士課程学生
氏名	横山実玖歩

<b>1. 派遣国・場所</b> (〇〇国、〇〇地域)
愛知県犬山市・日本モンキーセンター
<b>2. 研究課題名</b> (〇〇の調査、および〇〇での実験)
博物館・動物園実習
<b>3. 派遣期間</b> (本邦出発から帰国まで)
令和元年 7 月 17 日 ~ 令和元年 7 月 19 日 (3 日間)
<b>4. 主な受入機関及び受入研究者</b> (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
日本モンキーセンター、キュレーター、新宅勇太氏
<b>5. 所期の目的の遂行状況及び成果</b> (研究内容、調査等実施の状況とその成果 : 長さ自由)
写真 (必ず 1 枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの) の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
<b>実習のスケジュール</b>
7 月 17 日 日本モンキーセンターの歴史に関するレクチャー (伊谷原一先生) 骨標本作成の見学 (新宅勇太氏)
7 月 18 日 飼育業務の体験、手術の見学 動物園・博物館の役割に関するレクチャー (高野智氏)、園内展示の見学
7 月 19 日 獣医師による処置の見学 動物園における教育に関するレクチャー・来園者調査 (赤見理恵氏)
本実習ではモンキーセンターで働く飼育スタッフやキュレーターの方の活動を見学、体験させていただいた。
<b>1 日目</b>
午前中は京都大学の霊長類研究の歴史と密接にかかわる日本モンキーセンターの設立と発展についてのレクチャーを受けた。午後には標本の作成過程を間近で観察した。モンキーセンターでは 1 年に約 50-70 個体が死亡する。そのすべての個体について解剖がおこなわれ、内臓や毛皮、骨は研究の資料として活用するために保管される。内臓の保存や標本の作製には時間と手間がかかるが、これらすべての作業がキュレーターによっておこなわれていることに驚いた。欧米では分業化がなされており、標本づくり専門の職人がキュレーターの指示に従って標本を作製するようだ。日本でもこのような分業が必要なかもしれないが、そもそもキュレーターが在籍していない動物園もたくさんあり、遺体の十分な保存が困難な現実を考えると、実現は難しいのかもしれない。
<b>2 日目</b>
午前は飼育スタッフの方に教えてもらいながらニホンザルとリスザルの給餌をおこなった。群れの中に入り、餌を食べる数分の間に全ての個体の健康状態をチェックする必要があった。数時間体験しただけの自分は後ろについていだけで精いっぱい、知識、技術、そして体力を必要とする専門性の高い仕事だということがよく分かった。豪雨の中であったが当然休むことなく作業がおこなわれ、改めて命を扱う仕事であるのだと実感した。その後はヤクニホンザルの手術を見学した。現時点では手術をしなくとも不自由なく生活ができ、手術自体に大きなリスクがあるものの、今後のその個体の QOL 向上を考えて手術を決断したようだ。幸い無事に手術は成功したが、命に関わる緊迫した現場を肌で味わい、見学していただけた自分も強い緊張を覚えた。
午後は動物園・博物館の役割に関するレクチャーを受けたあと、園内展示を見学した。モンキーアパルト式のケージには消防ホースや植物などが多数設置され、野生の環境に近づける工夫がなされていた。しかし野生と全く同じ環境を作ろうとするのではなく、時には人工物を使って彼らの自然な行動を引き出すという、土地が狭い日本ならではのエンリッチメントの工夫がなされていることを知った。またけがによって腕を失った個体や病気の治療中である個体も、霊長類の社会性を考慮し、可能な限り他の個体と一緒に群れで展示するようにしているようだ。

## 「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

3 日目には獣医師による治療を見学した。下半身が麻痺し、寝たきりになってしまったブタオザルの褥瘡の手当てがおこなわれた。彼女のケージは、ロープなどが張り巡らされており、腕だけで移動できるようになっていたり、褥瘡を少しでも和らげるためにクッションが敷かれていたりと快適に生活するための試みが多くなされていた。けがや病気で展示が難しい状況になっても、最期まで面倒を見ることは今後高齢化が進む日本の動物園の飼育において重要な視点だそうだ。

午後には来園者調査を体験した。チンパンジー舎で調査をおこなったが、来園者の滞在時間は予想していたよりもずっと短く1分程度であった。また展示を充実させても、展示だけを見て動物はほとんど見てくれないこともあった。飼育環境や展示の工夫に加えて、飼育スタッフやキュレーターの方から話を聞いてもらう機会を増やすことで滞在時間を延ばしてもらえるかもしれない。

3 日間動物園・博物館に関わる様々な業務を体験、見学させてもらい、動物園の業務が、飼育スタッフ、キュレーター、獣医師、時には研究者など多くの方によって支えられていることを学んだ。さらに今回キュレーターの方々から話を聞くことが多く、動物、飼育スタッフ、研究者、市民をつなぐキュレーターの役割の重要性を改めて感じた。今後動物園と共同で実験をさせていただくことがあるかもしれないが、その際には今回学んだことが大いに役立つに違いない。

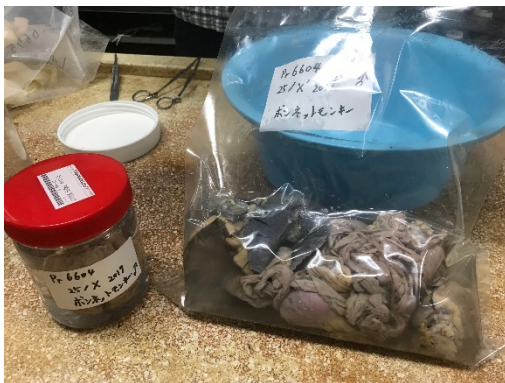


図 1 解剖後、臓器は1個体ずつナンバリングされて保管される。



図 2 屋内外問わず、興味深い展示が多数あった。



図 2 リスザルの朝食。フルーツや野菜、資料などがバランスよく含まれている。奥の個体の背中にあるアカンボウは生後1日であった。



図 1 Wao ランドにおける、ワオキツネザルの環境エンリッチメントの1例。木の穴に入った食物を口で取り出して採食する。

### 6. その他 (特記事項など)

本実習は、PWS の支援を受けておこなわれました。また実習中お世話になりました、日本モンキーセンターのキュレーターである、新宅勇太氏、高野智氏、赤見理恵氏、獣医師のみなさま、飼育スタッフのみなさまにお礼申し上げます。ありがとうございました。